未来に伝えたい“まいばらの水”12選

vol.20

米原には、深い山々が育んだ米原の美しい水が残されています。このコーナーでは、「未来に伝えたい“まいばらの水”」に選ばれた湧水や、地域と水との関わり、水に関する話題についてお届けします。

水にまつわるエピソード

米原には水にまつわるさまざまな伝説や昔話などが残されています。「まいばらの水」巡り、水と地域の関わりの次は、今に伝わる水にまつわるエピソードをご紹介していきます。

①十善寺遺跡（大鹿）

久志神社の裏山である岩祖山の山裾、十善寺谷と呼ばれる谷に水が湧き出ており、昔は雨乞いのために村人が参詣したといわれています。かつてこの辺に十善寺というお寺があったといわれており、その名残か今も灯籠だけが残されています。本郷にある浄休寺の前身で、織田信長の兵火で荒廃したと伝えられています。岩祖山は石灰岩の山であるため、この水は硬水寄りの水であると考えられます。ここは多和田へ抜ける旧道沿いであり、往来する人や山仕事をする人が飲用水としても利用していました。

②殿様みず（多和田）

多和田から山室へ通じる千石坂の西「いせ田」という場所の杉林の中ほどに、かつて清水が湧き出ている場所がありました。昔、殿様が休まれた際に、その水を汲んでお茶を差し出したところ、大変美味しい茶であると褒められ、それ以来「殿様みず」と呼ばれるようになったと伝えられています。農作業時の飲み水として、また死に水にというほど、美味しい水だったといわれていますが、圃場整備などが行われ、今は涸れてしまっています。

水の豆知識！
～その1　地球上の水～

青い惑星といわれる地球は、約14億立方キロメートルの水によって表面の70パーセントが覆われています。そのうち、97・5パーセントは塩水で、淡水は残りの2・5パーセントです。しかも、淡水の約70パーセントが氷河や氷山などの利用不可能な水であり、残りの約30パーセントも土中の水分や地下深くの帯水層の地下水となっています。そのため、人間が利用しやすい河川や湖沼などの地表水は淡水のうち約0・4パーセントです。これは地球上の水のわずか0・01パーセントに当たり、そのうち約10万立方キロメートルだけが、雨や雪で再生され、持続的に利用可能な状態にあります。

私たちが家庭用水として一日に使用する水の量は、一人当たり約245リットルといわれており、そのうち飲料用として使用されるのはわずか2～3リットルで、残りは炊事、洗濯、風呂、掃除、水洗トイレ、散水などほとんどが洗浄用として使用されています。

まいばらの水
イメージキャラクター
スイナちゃん

お問い合わせ　経済環境部　環境保全課（伊吹庁舎）☎58－2230　FAX58－1630